

## こんなものを読んできた(8)

～エドモンド・ハミルトン「スターウルフ」シリーズ (ハヤカワ SF 文庫)

校長 鈴木 健

今回紹介するエドモンド・ハミルトン「スターウルフ」シリーズは、小学生の時、私が初めて買ったハヤカワSF文庫です。先日、アマゾンで古本を物色していたら、懐かしくついポチってしまいました。

生徒向けはここに  
表紙の写真が入り  
ます。

エドモンド・ハミルトンは、SFがまだスペースオペラ(宇宙活劇)と呼ばれていた時代に活躍した作家です。スペースオペラとは、西部でカウボーイが活躍する小説(ホースオペラ)の馬(ホース)を宇宙船(スペースシップ)に置き換えた娯楽文学のことで、ハミルトンには「キャプテン・フューチャー」という人気シリーズがあります。イケメン天才科学者で運動能力も抜群のカーティス・ニュートンは、父親の親友で脳だけが生きている科学者サイモン、父親とサイモンが作ったロボットのグラッグ、人造人間のオットーと「フューチャーメン」を結成し、相対性理論などガン無視で宇宙船をぶっ飛ばし、悪党相手に大暴れ、というお気楽なお話です。

「スターウルフ」シリーズは、ハミルトン晩年の1960年代後半に書かれた作品です。1960年代ともなるとさすがに相対性理論は無視できず、SF的な設定も取り入れていますが、基本的には、波乱万丈なスペースオペラです。上の表紙のイラストもいかにもそんな感じですね(私が小学生の時でさえ、この絵はレトロな感じでしたが…)。

主人公の地球人ケインは、宇宙海賊スターウルフの星ヴァルナで孤児として育てられ、スターウルフになりました。ある日、仲間に裏切られて殺されかけたところを、地球の外人部隊の隊長ディルロに救われて隊員となり、スターウルフならではの能力で活躍します…。

SF小説としては、あまり見るべきところはないのですが、この作品の妙味はケインとディルロの人間関係です。物語の最初のころ、ディルロはケインを信用せず、スターウルフの能力だけを利用するつもりでしたし、ケインも生きるために外人部隊に身を置いているだけでした。しかしそろそろ自分の老いを感じているディルロは、若くて怖いもの知らずのケインを次第に自分の息子のように思うようになり、ケインもどんな苦境にあっても屈しないディルロの根性に敬意を持つようになります。

このシリーズはハミルトンが亡くなったため、第3巻までしかありません。子供のころは、第4巻が出ないことを残念に思ったのですが、しかし今読むと3巻のラストは、一度は引退を決意したディルロがやる気を取り戻し、ケインとともに「俺たちの居場所は宇宙だ」といって歩いていく場面です。これはこれでなかなかいい終わり方だと思います。名作というほどではありませんが、一度、読んでみてほしい作品です。

余談ですが、今回読み返してみて、この作品でそろそろ初老とされているディルロが実は40歳代というのが衝撃でした。40歳代なんて私から見ると、まだまだ若者なのですが…。